街道とまちづくり

第25回 豊前街道

木製灯篭のLED電球が街道を輝かせるまち豊前

豊前市長（福岡県） 後藤元秀

九州北部、瀬戸内海西端に面する豊前市はその名を旧国名に由来する。江戸時代に、北九州市・小倉と大分県中津市を結ぶ主要道が「豊前街道」として整備。小倉に向かえば「小倉街道」、中津に向かう場合は「中津街道」と呼ばれてきた。

江戸時代からの名残のある“中津街道”の一木邸

豊前の国にある八幡宮の総本山、大分県・宇佐神宮には奈良時代以降、天皇即位や国家に異変あるとき、祈願のため朝廷から勅使が派遣されてきた。沿道には和気清麻呂が道鏡事件解決のため国家の命運をかけて訪れ、この地に別表神社として存立する大富神社を拝んだとされる「拝みの松」や、勅使が宇佐神宮に参拝するときだけ使われる「勅使井」（井戸）がのこる。市内では当時の街道はいまも、ほとんどが国道などに拡張利用されているが、2カ所3㎞余だけは生活道路として使われている。

豊前を通る街道には、松江宿、八屋宿などの宿場がおかれていた。現在も当時の面影を残す町屋が軒を並べる。漁港の松江宿はなだらかな山が豊前の国で最も海まで迫り、鉄道駅が海そばに立ち、点在する古刹や古民家が往時をしのばせる。八屋宿には古い木造の趣ある呉服屋や醤油屋がある。四辻には、幕末の絵図にも描かれた石造りの道標がいまも行き交う人を見守っている。八屋宿本陣には全国海岸線測量した伊能忠敬が泊まったと日記に見られる。

街道の児童を見守る見守り隊と道標

中津寄りには江戸・文政年間につくられた港町「宇島」がある。街道沿いには白砂青松の海辺が続き大きな港は建設できなかった。小倉藩が鵜の止まる岩礁をいかして築港、莫大な資金と郡民の命を犠牲に海上交通の拠点を生み出した。

おかげで明治時代には関西、四国との交易で財を成した豪商も誕生している。後の商船三井につな

がる大阪商船を立ち上げた一人だ。豪商の屋敷は明治天皇のご名代として陸軍大演習視察のため来臨された小松宮彰仁親王のご休憩所にあてられたという。「お成りの間」は現在も当時と変わらぬ形で使われている。

戦前、戦中、戦後と日本のエネルギーの源が石炭だった時代には、炭鉱の坑道を支える坑木の荷揚げ基地として発展した宇島には、海上交通の拠点である港町ならではのエピソードもある。交易に使われた船宿には歴史上の人物、著名人も登場する。

福沢諭吉は福翁自伝「一夜の危険」の中で「鵜ノ島（当時の表記）」に宿泊、この港から神戸へ。そして江戸に、と出帆した記述がある。命がけでの藩脱出であった。漂泊の詩人、種田山頭火は宇島の旅館に連泊。その体験を「此の宿はよろしい」「30銭でこれだけの待遇を受けると、何となくすまないやうな気がする」などと記している。

この港町には、明治期に水産業界の代表として活躍した男も出現する。豊前国だけでなく併合時代の朝鮮半島沖に朝鮮政府と交渉して漁業権を獲得。漁民を半島に移住させて、日本の漁業技術を伝えている。この男を伝える石碑が港のそばに残る。その向かいにあるお寺には文久3年に建てられたとされる3層の珍しい鐘楼が見られる。幕末には物見櫓としてもつかわれ、現在も地域のランドマークになっている。

こうしたことを背景に、街道は平成22年には全国で116番目、九州で10番目の「日本風景街道」に登録され、その標柱が市内の道の駅「おこしかけ」など2カ所にある。地域の活性化を目指して古い街並みに木製の灯籠（とうろう）を設置する計画も進んでいる。福岡県建築士会・豊前地域会は大学生や中高生を巻き込んだ50人ほどで沿道にのこる旧家などを見て学ぶ「まち歩き」、古民家の調査などに取り組んでいる。高さ1・5mのスギ材を使った灯籠を10基作成して、街道の古民家前に設置する事業も展開。さらに増やす計画だが、灯籠のLED電球が灯り、照らし出された街並みの景色は、見慣れたが上に価値を忘れていた地区住民の気持ちにも大きな灯をともしつつある。

豊前街道の歴史には、いまも驚く遺産が多い。しっかりと次世代に伝え、輝かせるため、地域と民間の力を借りながら取り組まねばならない。

八屋にある一木邸の木製灯籠（LED）

一口メモ　豊前街道

周防灘沿いにはしる北部九州の主要道

豊前街道は中津街道とも呼ばれ、周防灘沿岸を通って小倉と中津とを結ぶ北部九州における主要道のひとつである。小倉からは苅田、大橋、椎田、松江、八屋、中津と続く。この道は小倉で長崎街道や秋月街道などと結ばれ、赤間関への渡海地点・大里から海を渡り、山陽道とつながる。

中津から南方面は、宇佐、府内、宮崎へと東九州を貫く日向街道の一部となる。豊前街道は、貝原益軒や菱屋平七なども歩き、貝原益軒は「豊国紀行」、菱屋平七は「筑紫紀行」にその旅のことを記している。

企画協力：全国街道交流会議「街道交流首長会」